

## 「小望遠鏡を用いた昼間の天体観測研修会」 に参加して 2008. 8. 6

清水湧三（宇治市教育委員会・理科支援員）

宇治市にある小学校の理科実験準備室を整理していると、棚の上に使われないで放置されている大きな木箱を見つけた。ほこりを拭くと木蓋に「昭和30年卒業生贈呈」と墨で書かれている。興味津々で中身はなんだろうと木箱を開けてみると、なんと屈折望遠鏡が出てきたのである。筐体はへこみや汚れが目立つ、レンズも対物レンズに欠けがあるが、全く使えない状況でもなさそう。付属品はというと、欠品も有りそうだが、手を加えて整備、再調整をすれば使えるのではと思った。さらにもう一台、屈折望遠鏡と三脚なども見つかった。どうもどれも長年、使われなくなって久しいようである。

昭和30年と言うと今から50数年前のことになる。当時この望遠鏡を使って星空を観察して宇宙の神秘に思いを寄せていた小学生たちは、今どのように思い出しているだろうか。当時としては、望遠鏡が小学校に有ることが珍しいらしい事ではなかったかなとも思う。

私の小学生時代は天体望遠鏡を覗いた記憶がない。ただ日食の時にスズで燻したガラス片で太陽の欠ける様子を観測した時の写真が残っている。担任だった先生が記録として写していたお陰で今もその状況が想いだされる。



感受性の高い子供時代における体験はなにごとにも代えがたいものがある。小学校の備品として、せっかくあるのだから、コレを使わない手はない。それなら、NPO 花山星空ネットワークの案内にあった「研修会」に参加して少しは勉強になるのではと思い参加してみようと思ったのだ。

「花山天文台における天体観測の研修会の様子」

早速にメールで受講申し込みをするも、5日は既に定員に達しており6日も残りわずかしかしきか席がない旨、返信があった。かろうじて申し込めた感じであった。このような天体観測機器の研修機会はそんなに無いから関心度が高いのだろう。

午前中の講義は、花山天文台図書室内で「太陽観測入門」、午後からは、かんかん照りの中庭で、小望遠鏡を使っての実習である。黒河宏企先生（京大名誉教授）、鈴木美好先生（三重大学非常勤講師）から講義と、実習現場ではNPO花山星空ネットワークの会員でもある安達さん、石井さんからも懇切丁寧に教えていただいた。同じNPO会員同士でもあるので話易さも手伝って楽しく学べた。

参加者の自己紹介から、物理や生物が専門でいわゆる地学関係は門外漢という理科系の先生方が多く見受けられ、同じ類でもある自分自身もこれで一面少しは気が楽になった。

盲学校の先生も参加されており、実際の教育現場での指導はいったいどのようにされるのだろうか。立場を自分自身に置き換えていろいろと想いを巡らすもなかなか見えてこない。やはり、これは日常実践されている現場を、見学させてもらうことが手っ取り早いかもしれない。天体観測という分野だけでなく、これまでの教育現場経験の無さが一番大きく影響している。いずれにしてもどの様にどうするかなど課題は依然として残ったままである。出来ればさらに具体的に目に見える形の指導方法も、つまり即実践で使える類のものがあればと安直な期待してしまっていた。この研修会の意図するところと少し的外れなことかもしれない。多分に他の受講者とはまた違った受け取り方していたと思う。今自分が、現実の置かれている状況から思うと、このたった1日の研修でもって、理解が深まるだけでなく、興味本位だけでは済まされない、ますます困難な険しい世界を垣間見たそんな感じに変わっていた。

後日、この研修会を開くにあたってのスタッフ側のいろいろな準備作業や裏方仕事の大変さを漏れ聞いた。受講者の立場でいると、その辺の事情が、知らないというか知らされていないし、また気付いていなかった。次回は何んらかのお手伝いができるのではとも思っている。

ホコリまみれの「レンズ」をキレイに磨き、ぼんやりとした頭にカツを入れて、くっきりとした天空を仰ぎ見て見たいものである。

「理数科教員指導力向上研修」受講証明書を頂いて修了、お開きになったが、これからの現場での応用が正念場であることを肝に銘じたい。